

優秀賞

松葉杖が教えてくれたこと。

立命館守山高等学校 1年 大八木 望

私は十六歳にして初の松葉杖での生活を経験した。中学生の頃からよく怪我はしていたけれど足の怪我は初めてだった。包帯でぐるぐる巻きになった左足は自分の体ではないような不思議な感覚だった。

松葉杖生活初日。私の全身はたった一日で限界に達した。怪我をしている足以上に、手の平や脇、腕が痛くて痛くて仕方がない。松葉杖を甘くみていたことを深く後悔した。世の中はハンデを持つ人に優しくない。学校までの道のりだけでも段差、段差、段差；狭いトイレには入るだけで一苦労。普段当たり前歩いている道も、休憩しながらでないと歩ききれない。毎朝いくつもの分厚い壁を超えて登校している気分だった。他にも私には恐れていたものがあつた。それは「人からの視線」だ。元々人に見られることがあまり好きでない私は松葉杖をついているだけで人に見られてしまうのではないかと心配していた。

松葉杖生活の間、私は通常では考えられない程の視線を感じた。しかしそれは優しさの目だった。「ゆっくりで良いから気をつけて降りてね」と言ってくれたバスの運転手さん。「お大事にね」と優しく声を掛けてくれた腰の曲がったおばあさん。駅のホームで椅子を譲ってくれたお兄さん。エレベーターから出る時、扉を押さえてくれた先生。一緒に歩く時、自然と私に合わせてゆっくり歩いてくれた友達。たくさん人の温かな視線、気づかひを感じて怪我をしているはずなのにたくさん喜びを感じた。

そして迎えた松葉杖とお別れの日。ほんの少しさみしい気がした。左足の筋肉は少し落ちてしまっていたけれど、松葉杖生活で人の優しさに触れた私は前までとは違う。以前は少し迷っていたことも今日は自然と。

「いい座ってくださいね」

「急がなくて大丈夫ですよ」

今の私に心の壁はない。たくさんの人にもらった優しさを返す番だ!!